

港北区災害ボランティア連絡会ニュース

事務局 〒222-0032 横浜市港北区大豆戸 13-1 吉田ビル 206 港北区社会福祉協議会

第17号

TEL 045-547-2324 FAX045-531-9561 E-mail info@kouhoku-saibora.net

2014年2月

HP <http://www.kouhoku-saibora.net>

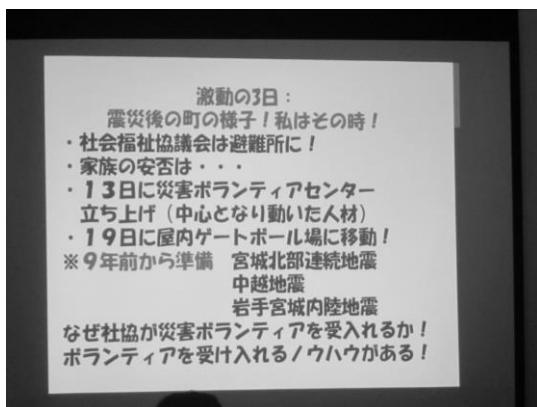
入会は随時受け付けています。あなたの町の防災度を高めるにお力を貸して下さい。

宮城県七ヶ浜に学ぶセミナー

ボランティアを大切にしたセンター運営

2月1日(土)に災害ボランティアセミナー～事例から学ぶ 災害時のボランティアセンター運営とは～が開催されました。今年東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県七ヶ浜でボランティアセンターを立ち上げ、多くのボランティアの受入れ・コーディネートを行なった七ヶ浜町社会福祉協議会職員：星真由美氏を講師にお招きしました。

午前中はボランティアセンター立ち上げから運営する中での課題や問題点などを事例に基づき講演をしていただきました。センターは地元の皆さんの力で運営されています。被災地の皆さんと全国各地から駆けつけるボランティアと地元スタッフとの強い絆、今回の震災で得た大切なものであると伺いました。センターのモットー「来てくれるボランティアを大切にしたい！」がそのまま伝わってくるDVDも拝見しました。被災直後から現在ではニーズも変化し、現在では「ひとりひとりの抱えている問題が大きすぎる」と思われるほどの支援が必要となってきていると。そのご苦勞の大きさに頭の下がる思いでした。「事前準備は何をしても無駄ではない」その言葉に私たちも出来る限りの準備、勉強をしてまいりましょう。



午後は災ボラメンバーの原氏をコーディネーターとしてパネルディスカッションをおこ

ないました。パネリストは星氏、3.11で横浜市内唯一防災拠点センターを立ち上げた実績のある拠点運営委員会事務局長の斉藤氏、災ボラ井上会長、災ボラメンバーで実際に被災地にボランティアとして参加するだけでなくボランティアを送り出す側の経験を積んできた渡部氏の4名です。遠藤氏からは拠点運営を円滑に進めていくために、各担当のスペシャリストをいかに育て上げるか努力されているお話がありました。今後各拠点と災ボラとの関係をいかに構築してゆくか課題でもあります。今回のセミナーがその一歩になればと思います。ボランティアは「(自分が)やりたいこと」ではなく「(被災者が) やってほしいこと」をしていかなければならない。センター運営には臨機応変さと、また必要ならばボランティアを断る勇気の必要である。そんな話ができました。井上会長からのより一層「減災」の努力が必要、星氏からの「たとえ遅れてきたボランティアであっても目配り、気配りを！」印象に残った言葉でした。

会場いっぱいの参加者があり、是非とも今後の活動に繋げていきたいと思います。



(パネルディスカッション風景写真)

なお今回のセミナーでフィリピン台風被害の支援を呼びかけましたところ、みなさまより18,756円の募金が集まりました。心より御礼申し上げます。早速神戸のCODE(海外災害援助市民センター)へ送りました。(小澤)

第9回定例会報告

平成26年1月15日(水) AM10時～

港北区福祉保健活動拠点多目的研修室

出席者：井上会長(港北区ボラ連)、白井副会長(個人)、富士塚ボランティアグループ、国際救急法研究所、港北区地域子育て支援拠点どろっふ、手話サークル梅の会、手話サークルあじさいの会、国際交流ラウンジ、港北区ボラ連、仲手原マザークラブ、個人会員4名、片桐、山本、(区社協)司会=白井副会長 記録=和田

(1) 各タスク進捗報告

◇シミュレーション

12月7日無事終了。

◇イベントタスク

2月1日セミナー開催に向けて打ち合わせ。

◇PRタスク

申し込み書を作成したので活用して下さい

(2) 次年度について意見集約

◇定例会の時間や曜日について

・昼間の定例会11回開催される内2回は夜間開催でも良いのでは。

・月によって日時を変更するのは難しい。

・いろいろボランティアをやっている方には曜日、時間が変わることはとても大変。

・仕事をしているので昼間の定例会に参加はできない、夜間だったら参加できる。

・多目的ホールは希望する団体が多いので予約するのは難しい。

・時間の制限によって参加できない人も必ずいると思うので年間計画の中で考えてほしい。

◇イベントの開催時期について

・シミュレーションは12月で良かった

・イベントタスクは開催時期(9月・10月・2月)の期間が短かったため余裕がなかった。

・振り返りの意見があっても良いのでは

・次回の定例会に25年度総括して26年度に向けての意見を模造紙にまとめる。

・26年度→毎年タスクを変えるのも良いが継続で深く勉強するのも力になると思う

(3) その他

・港北区の出初め式に一昔のバケツリレーが復活された。初期消火にはバケツリレーが適しているため各地域でも取り入れている。

・横浜市の出初め式に参加 以上

災害ボランティアコーディネータースキルアップ研修

横浜災害ボランティアネット主催研修会

研修の目的は災害ボランティアセンター運営にあたるコーディネーターとして求められる役割や大切にすべき視点などを学ぶというものです。

最初に横浜災害ボランティアネットワーク会議運営委員長の河西英彦氏より「横浜市内の災害ボランティアの取り組み状況について」と題する話がありました。

続いて Community Empowerment Office FEEL Do 代表、支援者のための支援センター TOMONY 代表の桑原英文氏より「災害時のボランティア活動と災害ボランティアセンター」と題する話がありました。

阪神淡路大震災以降、数多くの被災地で支援活動を行い、東日本大震災では被災県内の災害ボランティアセンターの運営支援を行った豊富な経験から、被災者主体、被災地中心の支援活動の重要性が述べられました。(山本)

防災ギャザリング2013

連絡会の活動を広く伝える

大和市と瀬谷区と合同で「災害ボランティア活動におけるICT技術活用」の啓蒙活動を行いました。日頃から住民が主体となって、防災・減災活動を地元主体で行うことが重要で、そのためにはHPやtwitter、Facebookを使って情報を収集し、如何に活用していくかを話し合ってもらいました。参加者からは、自治会に入っているがなかなか情報共有が出来ない、若い人たちが集まらない、パソコンや携帯を使った情報発信もお年寄りには伝わらない、等色々な問題点がでました。そこで連絡会が取り組んでいる、ネットと紙の複数のチャネルでの情報発信を行うことで少しは改善される旨をお伝えし、好評を得ました。

また、参加者には有事の際には行政がなんとかしてくれると思っている方も多かったが、実際には自助・共助が重要で、そのツールとしてITを使って情報の発信・収集に日頃から慣れておく必要があることを説明しました。(野田)

2月定例会

2月19日(水)10時～

港北区福祉活動拠点

災害ボラセンの立ち上げと課題

伊豆大島災害からの教訓

東京ボランティア・市民活動センター加納佑一
大島の復興支援に当たっては皆様から多大なご協力を頂き、誠にありがとうございました。

大島での経験が少しでも次の災害による被害の軽減につながればと思い、「災害VCの運営」と「情報発信」についてお伝えします。

●大島の被害状況

1月16日未明、大島では台風26号の大雨に伴う三原山の大規模な崩落により、大量の土砂が民家を襲った。崩落したすぐ下の神達地区は一瞬にして土石流に埋もれ、今は面影もない。



土石流はその後も沢沿いの民家をなぎ倒しながら、進行を続け海まで到達している。大島全体から見るとけして広い範囲とは言えないが、沢沿いの地域の被害程度は目を見張るものがある。このような状況に加え、被害を受けた地域の多くは高齢者世帯であったこともあり、死者36人、行方不明4人(26.1.31現在)という甚大な被害を残すことになった。

●大島社協災害VCの立ち上げと活動内容

大島社協が災害VCを立ち上げたのは、その翌々日の18日正午である。被災後もなお天候が悪い日が続いており、また週末には台風27号・28号の接近も控えていたさなかでの立ち上げだった。しかし早期の島外への情報発信が必要だったことに加え、島民自身が自主的に泥だし活動を始めており、それへのサポートが求められていた。島内・外のボランティアは増え続け、離島でありながら11月には最大で1日500人を受け入れ、昨年12月27日までに延べ7168人を数えた。活動は泥だしだけでなく、避難所支援、サロン活動も同時に行った。12月以降は避難所や地域でのサロン活動、復興支援情報をまとめた瓦版の配布などの生活支援ボランティアが活動の中心となった。

●様々なボランティア・NPO団体とともに歩んだ災害VC

大島社協災害VCの運営において何よりも特筆すべき点は、外部の様々な力をうまく取り入れた点であろう。過去の災害での支援経験があり、かつ長期でボランティア活動ができる人やNPO団体の存在は非常に大きい。もともと大島社協のマンパワーが限られていたが、1つの団体だけで災害VCを運営するのではなく、色々な人や団体と一緒に考え、一つずつ悩み、運営を行ってきた。例えば民宿もボランティア活動先の対象とするか、いつ島外のボランティアの受入れを終了するか、支援を行う中で判断に迷うことは幾つもある。これといった正解があるものばかりではないのが現状だ。

●情報発信が災害VC運営のキモ

情報発信の仕方、ボランティアの受入れがうまくいくかどうかの大半が決まると言っても過言ではない。大島社協では、災害VCを立ち上げた18日にfacebookを開設、情報発信を行っている。この時に出した情報は

- ・ボランティアの受入れ方針とその理由
- ・地域の被害状況
- ・地元の島民の様子
- ・ボランティア活動の様子

これらは、今もfacebook上に掲載されている。

今、多くのボランティアはソーシャル・ネットワークワーキング・サービス(SNS)により、被災地の情報を収集している。逆に言えばそこへの情報発信により、ボランティア受け入れをある程度コントロールすることができる、ということだ。よって現地からの情報を、どのタイミングで、どのような内容の情報を出すのかということが非常に問われることになる。東日本大震災時には「危ないから行くな」という言説が広がり、ボランティア活動抑制につながったという批判もあった。対象を限定する場合は、なぜ限定するのか、その理由を具体的に記載することが重要だ。これまでの災害VCではボランティアやマスコミからの電話対応に時間を取られ、人手を取られてしまう傾向があった。適切な情報発信は不要な問合せを減らし、支援活動に専念できる環境を作り出す。

また、大島の復興支援については、まだ緒に就いたばかりである。1月24日に被災から100日目を迎え、その翌日25日から仮設住宅の入居が開始した。今後も末永く、大島の支援をお願いできればと思う。

会員紹介 横浜北 YMCA

横浜北 YMCA は、港北区災害ボランティア連絡会設立時より、関わらせていただいております。阪神淡路大震災での経験から、災害時、応援に駆け付けてくださるボランティアの皆様をいかに適材適所に復興支援活動に携わっていただくか、そのためには地域の人たちによって対応する組織が必要であると考えられ、災害ボランティア連絡会がスタートしました。これまで、阪神淡路大震災をはじめ、新潟中越、新潟中越沖、東日本大震災などの震災復興支援活動に携わってきました。そのなかでボランティアの方々を受け入れる組織、そのなかで役割を担うコーディネーターの重要性を感じました。災害が起こると、その地域の方々には被災者となり、災害ボランティアセンターに携わることが難しくなる可能性があります。だからこそ、多くの市民の方に災害ボランティアセンターの存在を知っていただき、誰でもセンターのコーディネートができるようにしていくことで、災害に強い街になっていくのだと思います。災害はいつか起こります。その災害にいかに地域として向き合い、災害を小さくするために減災への取り組み、そして地域で復興に向けて力をあわせられる街づくりをこれからも皆さんと一緒に行っていきたいと思います。

役に立つ災害本

奇跡の災害ボランティア「石巻モデル」



東日本大震災で最大の被災地の一つ石巻では延べ約 10 万人以上のボランティアを受け入れてきた。しかも社協の入るビルも津波で被災し職員も犠牲となった。にもかかわらずこれだけの多くのボランティアを受け入れられたのにはいくつかの

ルールが存在したからだ。

「ボランティアを受け入れる仕組み」「ボランティアにとって居心地のいい環境作り」「ボランティアを継続的に募集するノウハウ」の構築だ。これまでの災害ボランティアは社協が主体となってニーズを聞き出す受動型がメインだった。しかし石

巻では NGO が主体となって自らニーズを集める能動型に変わった。行政は避難所にいる被災者の情報はある程度把握できても、在宅避難者の数は把握できなかった。NGO はそう言った所を中心にボランティアを派遣して行った。しかしニーズ調査は単に数を集めればよいという物ではない。課題を聞いた後解決策まで責任を果たさないと、被災者とボランティアの信頼関係が損なわれてしまう。ボランティアと行政が連携して「機能」させないといけないのです。

石巻では社協が中心のボラセンとは別に協議会を作り、その下に活動目的別に分ける分科会を作って、NGO を適材適所の活動目的別にマッチングして行った。そのため効率のよいボランティア活動に専念することが出来るようになったのだ。

また、避難所に指定されていなかった石巻専修大学にボラセンを設置した。2011 年 3 月 31 日に防災協定を結ぶはずだった。しかしそれを待たずに震災が起きた。しかし学長は避難者の受け入れとボラセンの設置を即答した。その柔軟性が多いボランティアを受け入れる器を作ったのだ。

今被災地はボランティア主導ではなく、被災者主導での復興の段階に来ている。被災者が各自ボランティアリーダーとなって復興支援を行う必要がある。被災者が如何に自立をしていくかを支援していくことが重要となってくる。（野田）

行ってみよう 伊豆大島椿祭り

2014 年 1 月 26 日～3 月 23 日

東京竹芝桟橋から 1 時間 45 分

片道 1500 円キャッシュバックキャンペーン中
詳しくは東海汽船 <http://tokaikisen-tsubaki.jp/>

編集後記

☆気仙沼で出会ったワカメ漁師さん、新船ができるそうです。ワカメの収穫は厳冬の浜での過酷な作業です。この投資が生きることを願います。（宇田川）

☆日光街道を石橋から宇都宮まで、奥州街道を宇都宮から喜連川まで歩きました。喜連川温泉で冷え切った体を温めました。（山本）

☆大島では椿まつりが行われています。もう大島の災害はみなさん忘れてしまっていないですか？被災地のことを考える、伝えることも支援の一つの形です。（野田）

☆花粉症、感染症、PM2.5 などがあり、現代社会で「マスク」は不可欠！？でも、マスクをかけるとメガネが曇る。「マスク」をとるか「メガネ」をとるかそれが問題だ・・・（山口）